

E-21 食生活の変化とそれが家計に及ぼす影響 (第1報)

—— 外食利用の状況と主婦の意識 ——

東京家政大 ○大森和子 都立立川短大 大竹美登利 郡馬大 ^(非常勤) 今城治子

目的 既製の利用等、衣に同する家事労働の社会化につづいて、昨今は食生活分野の社会化が著しい。特に外食産業の発展にとともに、外食が増加しているのど、これを主として食生活の変化を調査し、それが家計に及ぼす影響について研究する。

方法 本報の調査対象は東久留米市瀧山団地(約3000世帯)の住民台帳から、ライフステージ別に層化無作為抽出を行った600世帯の主婦である。回収は417、回収率は約70%である。調査時期は55年2月、調査内容は外食利用の状況とそれに同する主婦の意識を主とした。

結果 家族づれの外食は月に1,2回が50%、年に3,4回が26%で、外食の回数が2,3年前と変わらない……42%、回数が減ったものは、ふえたものより上まわっている。利用する店はファミリーレストランが51%で最も多い。だんらんのための外食の経費は、1人当り1000円~2000円が37.4%、500円~1000円が30.9%である。夫が昼食としてとる外食は、500円~1000円が71.2%、妻が昼食を外食にする場合は500円未満が51.5%、次は夫の500円未満19.7%、妻の500円~1000円が29.3%と1位と2位が逆になっている。家族づれの外食に対しては、「たまには外食もよいか、食事は家庭料理がよい」というものが74.8%と多い。外食と食費の関係については、「家族そろっての外食はレジャー費と考えているので、食費だけと問題としていない」という答えが57%、「食費が多くなるから、できるだけしないようにしている」というものが20.4%とこれにつづいている。ライフステージ別にちがいがみられるのは、その回数や選ぶ店であり、外食についての意識にはあまり顕著なちがいはみられない。